

現代社会と民俗学*

河野 眞

Folklore in Present-Day Society

by Shin KONO, Professor of Folklore.

College of International Communication, Aichi University

Abstract

The present paper is a folkloric examination of the structure of present-day life. If viewed in that way, it will be discovered that our life consists of two main life-styles, modern and traditional, and that we live by choosing one of those life-styles which is more convenient to us. The choice is sometimes made continuously, but often made otherwise.

Our taste for food, for instance, is conventional, generally speaking. This is proved by our occasional, but often intense, interest in ethnic foods, though its intensity varies from case to case. Another example of tradition in taste may be found in 'Mom's home cooking', the familiar taste handed down from generation to generation.

It must be realized, on the other hand, that traditional culture is consciously chosen. This choice can be explained by the following three examples. One is the case in which patients suffering from intractable diseases or fatal diseases seek to find a folk remedy for their treatment of the illnesses. Surprisingly this fact tells us that they are relying on traditional treatment in the age of science. Religion and magic still have values and can meet modern technology.

Second is a link between modern business activities and *Fen-sui* (wind and water), a sort of astrology or onomancy developed in China since the Middle Ages mainly by interpreting landforms and direction. An example will be an able manager equipped with high-level business administration happens to turn to fortune-telling to get out of his difficulty. This is a case in which traditional element is employed at the limit of business strategies rationally developed. Characteristic is the factor of play or game in those cases.

A third example may be given by a snapshot, perhaps a memory of sightseeing, in which a woman is seen posing in the latest fashion before an old house. Her posture shows the calculation that folkloric elements can provide stimuli in the modern world. More effective elements such as iceberg or snow-clad

* 本稿は2001年11月9日に中国の西北大学(陝西省西安市)において西安市社会科学院民俗文化研究所の主催で開催された民俗文化研究会でおこなった講演にもとづいている。主催者の趙宇共所長、司会を務められた周星教授、通訳をして下さった林美茂氏(愛知大学大学院博士課程修了)に感謝を申し上げる。

Alaska can take place of an old house.

What is proved above is the folkloric elements working as something heterogeneous in our everyday life. That is why they are effective when made use of consciously. Our urgent mission is to discover and fix where traditional folk culture stands in contemporary society, for the meaning of folk culture in the present-day world lies in its difference from the general standard of our daily life.

The present paper is based on my presentation made on the 9th November 2001 in the Meeting of Folklore held in Xi-bei University, Xi-an, China. The Meeting was sponsored by Professor Zhao Yugong, President of Folklore Society, Social Science Academy, Xi-an, China. I thank Professor Zhao, Professor Chou Xing, chairman who presided over my lecture and Mr. Ling Mei-mao who interpreted my lecture.

はじめに — 民俗学の定義

本日の話は、民俗学とは何であるかをはっきりさせておくことから始めようと思います。ひとつの学問を定義するのはいささか冒険です。しかし小さな問題をあつかう場合でも、その問題が属する学問分野の性格を明確に意識することが、時には必要になります。これから取り上げる話題では、特にそういう観点が大切でしょう。すると、こういうことが言えるのではないのでしょうか。「民俗学とは、民衆の生活文化の伝統的な形態を系統的に解明する学問である」ということです。これは特に斬新な定義ではありません。民俗学をめぐる常識的なイメージをなぞるという程度です。ですから余り異論は出ないでしょう。むしろ陳腐であると批判されかねない位です¹⁾。

次にこの定義を分解して幾つかの要素に分けてみます。すると、ここには3つのことが含まれていることが分ります。第一は、民俗学は民衆の生活文化を扱う学問であるということ、第二は、民俗学は伝統的形態に着目するという点、第三は、民俗学はそれらの系統的な解明をめざすものであるということです。この3つの要素もまた民俗学についての一般のイメージから懸け離れてはいないでしょう。これらについて、もう少し補足しましょう。

第一の、民俗学は生活文化をあつかうということは、民俗学は生活文化の担い手である人々を対象とする学問ということになります。すなわち、無名の多くの人々の日常の営みに着目するわけです。これは必然的に民俗学は民衆学であることを意味します。また生活レベルの営みという点で、他の学問とは趣が異なります。すなわち歴史学や政治学や経済学、さらに文化史研究も民衆を対象としますが、民俗学とはやはり重点の置き方において相違すると言わなければなりません。

第二は、そうした生活文化を伝統的な形態において探求するという点です。たとえば衣食住のような基本的な項目についても、民俗学があつかうのは、長く伝統を形づくってきた文物です。すなわち古い時代の社会的な区分の標識であった服飾のあり方や晴着と普段着の区別など（いわゆる民俗衣装）、また各地の伝統的な食文化のあり方（晴れの食事と普段の食

事の具体的な形態など)、さらに四合院などの伝統的な家屋建築の形態などです。逆にみれば、現代の最先端の現象であるファッションやファーストフード店のメニューやOA機器が装備されたオフィスビルの仕様などは、民俗学が何にも増して注目すべき対象ではないということになります。

第三は、そうした対象をあつかうにあたって、系統的な解明を心がけるということです。特定の現象に絞った調査・研究は重要ですが、それに終わらないとのこと。たとえば小麦の栽培について、播種や刈取りの実態やそれに伴う儀礼を詳細に観察し、克明な記録を行うことは大切なことですが、それはさらに大きな脈絡のなかに位置づけることが期待されます。すなわち直接問題にしている集団と、他の集団（他の地域の人々や他の民族など）との関係、つまり同じ種類の民俗が行なわれている場合には、両者のあいだにはどのような関連があるのか、またそれらの歴史的な変遷などです。

民衆文化における伝統と現代

そこで本日のテーマです。民俗学が研究の対象としてきた、また今も主要に対象としているのは、生活文化の伝統的な形態です。ところが、これは大きな問題を含んでいます。伝統とは異なった要素が一定の比重を占めている現実があってはじめて、〈伝統〉という言葉が意味をもったものになるからです。言いかえれば、〈伝統〉は、〈現代的〉や〈同時代的〉と対立する概念、もしくは対比されるとき概念です。では伝統を駆逐したり、それに取って代わって優勢になっている現代的な形態とは何でしょうか。またそのとき伝統的な形態はどういう様相にあるのでしょうか。

これは現代社会の特質とは何であるかという問でもあります。したがってきわめて大きな問の立て方で、何を手がかりに答えるべきか戸惑わせるほど茫洋とした設問です。またこの設問への取り組み方は、立場や観点によっても異なるでしょう。政治史などでは、現代社会の成立を封建制から民主主義や社会主義へのであるかによるでしょうし、経済学の視点からは資本主義や市場経済の展開をもって今日の特色とするかも知れません。さらにジェンダーの観点からは女性の社会進出をもって過去と今日の最も大きな差違とみるかも知れません。では民俗学の立場からはどうでしょうか。

(ヘルマン・パウジンガーの見解)

この点では、世界の民俗学界で重視されている理論を紹介する方がよいでしょう。チュービンゲン大学（ドイツ）のヘルマン・パウジンガー教授で、民俗学を、現代社会を扱うことができる学問に向かわせる上で重要な理論を提唱してきた人です。私事ながら、私はパウジンガー先生から直接教わったことがあり、またその学説を日本に紹介してきたのですが、現

代の民俗学のあり方が問題になるときは、その学説は世界の多くの国々において基礎理論のひとつとなっています。そのパウジンガー先生の説によると、民俗の変質が根本的には何によって起きたかという、それは科学技術の浸透であったとされます。近・現代において著しく発達した科学技術、とりわけその産物である多種多様な技術機器が生活の隅々までは入り込んことによってもたらされた変化に、民俗学は最も注目しなければならないというのです。伝統的な生活文化の形態が大きく変化してしまったのも、突き詰めればそこに原因があるというのです²⁾。

この説はまことに尤もなところがあります。私たちの身の回りでも、そこには100年あるいは150年まえには存在しなかった数え切れないほどの技術機器が動いています。電灯、ラジオ、テレビ、電話（現在では携帯電話）、汽車、電車、さまざまな種類の自動車（乗用車、バス、トラックなど）、電気洗濯機、電気冷蔵庫、電気掃除機、音響機器など、数え上げれば切りがありません。

また生活のレベルでは直接見えてはいないものの、技術機器の関与が自明のようになっている状況もあります。たとえば麺類を食べるといふ食習慣は昔も今も同じであるとしても、元になる穀類の生産から家庭やレストランでの調理に至る一連の過程には、農作業における耕運機や種蒔き機やコンバインや脱穀機や製粉機から、輸送における自動車の使用、さらに調理の段階での電気器具の使用まで、数多くの技術機器が介在しています。しかもそうした技術機器の存在や活用は、私たちには至極当然な生活環境なのです。つまり現代の私たちの生活は、科学的な技術機器との自然な交流のなかで営まれています。

こうして私たちは科学技術が一般化した環境に暮らしているのですが、そうした今日の状況が過去の生活文化とは違ったものとなっていることは、誰もが何らかのかたちで感じています。テレビや携帯電話が欠かせない生活のあり方が、伝統的な生活の形態と異なることは明らかです。昔は存在しなかった個々の機器が機能しているだけでなく、それらの機器は全体として生活の大きな枠組みを変化させてきた面もあります。それを具体的な事例で考えてみます。

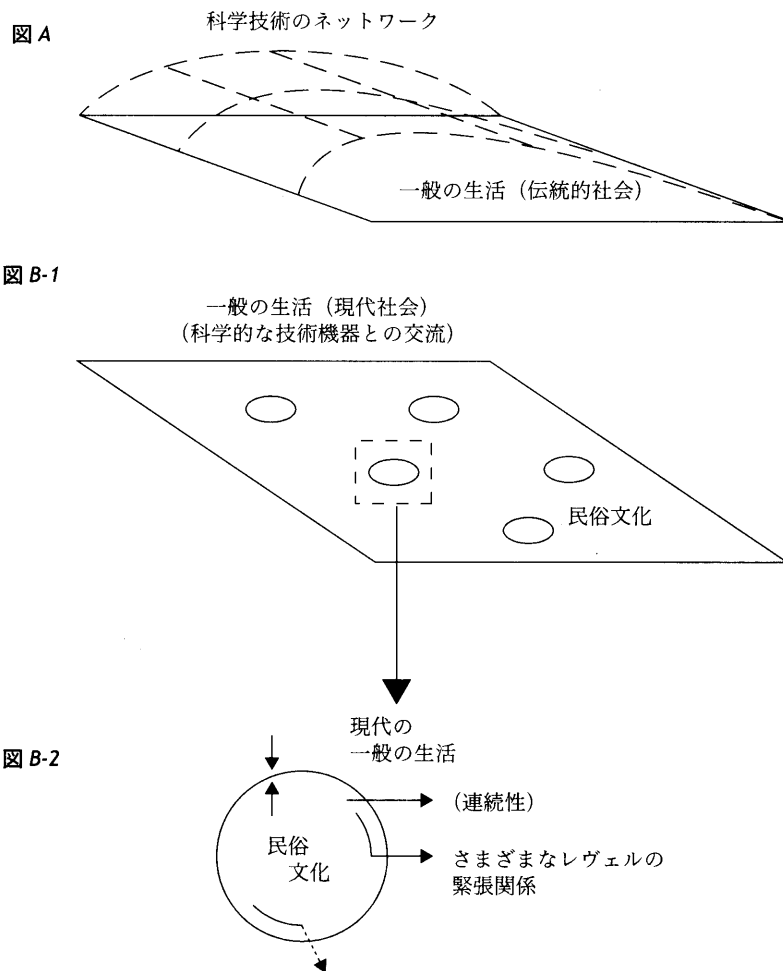
（科学技術の浸透によって生活の枠組みが変化した事例—〈隣村〉という伝統的区分の消滅）

〈村〉という概念があります。民俗学は、この〈村〉という人間のまとまりを大変重視してきました。村はひとつの完結性の強いまとまりとされ、したがってその境界は大きな意味をもっていました。ところが、近代に入って交通や通信が発達すると、この伝統的なまとまりは根本的な変化を被ることになりました。つまり鉄道が通じ、道路に自動車が行き交うようになると、これまでのような決定的な境界の性格がもたなくなります。たとえばこれまでの村と村の境界を超えて多くの人々が通勤をするようになります。また電話が普及すると、遠く離れた場所と場所のあいだでも音信が成り立ち、ビジネスがなされるようになります。そ

うなると、本来、徒歩による一定の行動の限界とか農作業や手仕事に規定された空間の区切りである伝統的な村境はほとんど意味をもたなくなります。どこが境界であったのかすら忘れられてゆきます。あるいはその伝統的な狭隘な区切りが何らかの阻害要因とみられるようになることもあります。そうして、幾つかの村が合併されて新しい市を形成したり、村が既存の市や町に編入されたりしますと、行政区画の上でも、村界は消滅してしまいます。つまり、この百年ほどの科学技術の発展の結果、何百年にもわたって人々の生活の枠組みであった村の境界が崩壊してしまうのです。

現代社会における異質文化としての民俗文化

(概念図)



以上はバウジンガー教授の説を紹介したのですが、これを基礎にして、さらに考察を進めようと思います。そこで、以下の説明のために、3種類の図を用意しました。図Aは、過去の生活文化の概念図です。そこでは手仕事や人力（それに加えて精々、家畜の使役による動力）が主要な動力になって一般的なレベルができており、そこにその時代その時代の先端的な科学技術という網の目が細く薄くかぶっているという状況を示しています。逆に言うと、いつの時代にも科学技術は機能していたのですが、今日とは違ってそれは日常の生活とは距離のある特殊な知識であったと言えるでしょう。他方、図B-1は、現代の様相を示しています。すなわち科学的な技術機器との交流が日常的となり、それが一般的な平面となって、そこに手仕事や、伝統的な文物が点々と浮いています。それらは一般的な土台となっているのではなく、孤島のように、あるいは穴が口を開けるように存在しているということを示しています。そして現代の私たちは、一般的な平面と、孤島ないしは穴のあいだを行き来しています。しかしここで重要なのは、伝統や民俗文化との関わりは、自然な仕方で、つまりあまり意識せずになされるのではなく、多かれ少なかれ緊張したものであることです。そして図B-2は、一般的な平面と伝統・民俗文化の関わりの部分を拡大したものです。つまり生活文化の通常のレベルと民俗文化の間では、人はその両方を行き来するのですが、そこには一種の決断や跳躍があるということです。すなわち異質なものと関わりの意識なのです。

現代社会における民俗文化の実際—食生活における連続性と非連続性

次に、生活文化の伝統的な形態、すなわち民俗文化が現代社会においてどのような位置にあるかをさらに突っ込んで考えてみる必要があります。つまり、現代の私たちが民俗文化への関わってゆく仕方にはさまざまなタイプやレベルがあって、決して単純ではないからです。またそれを分類する視点もひとつしかないというものではありません。たとえば、連続性と非連続性という2分法も可能です。

連続的というのは、現在の状況のなかに伝統的な様式が自然にとけこんでいる場合です。具体例を挙げれば、食生活は一般に保守的な性格をもっています。子供のときに覚えた舌の感触は大人になっても簡単には変わりません。いわゆる〈家庭の味〉とか〈お袋の味〉です。それは多くの場合その土地その土地の郷土料理と重なりますので、そのようにして伝統が持ち伝えられて行きます。郷土料理やその味付けも変化してゆきますが、比較的長い時間をかけて緩やかに動いてゆくということなのでしょう。もっともこのように断言すると、目下至るところで盛況を博しているエスニック料理はどうなのかという疑問が起きるかも知れません。これは言ってみれば、食生活における非連続的な要素です。実際、各国の変わった料理の店が繁盛しているのは世界的な現象です。昔は生魚を食べるのは日本独特の珍しい食習慣と受けとめられていましたが、それすらも現在では様変わりしており、たとえばイギリスのロンドンだけでもこの10年ほどのあいだに60軒を越える回転寿司店ができていとされています。

す。また各国の料理だけでなく、同じ国のなかでも各地の郷土色を盛り込んだレストランが多くを客を集めています。中国は国土の広大な国ですから、地方によって料理も大変異なります。西安のような大都会であれば、代表的な地方料理の店が幾つもある、食生活を一層華やかにしています。すると、こういう多彩な現象はどのよう理解すればよいのかということになります。私の見解を言いますと、食生活は基本において保守的なものであり、そのしっかりした土台があるからこそ、表層においては多様な関心が花開き、またその表層の関心は一定せず絶えず目先の変わったものへ向かう流動性をしめすことができるということではないでしょうか。

食生活の根幹部分のように自然に継承されている民俗文化が少なくないことは事実ですが、他方で、多くの民俗文化が非連続なあり方にあることにも注目する必要があると思います。民俗文化は、食文化を例に挙げて説明したような自然な連続性において今日も生き残っていると考えられ勝ちです。特に民俗学の研究者はそういう見方をします。そしてその残存するものが少ないことを嘆いたりします。しかし多くの民俗文化は今日では消滅してしまったか、消滅しつつあるかであると理解する方がよいでしょう。それは先に挙げた〈隣村〉との境界の消滅を見本にとってみてもあきらかです。民俗文化の継承を必然的にさせてきた基盤そのものが無くなってしまったのです。

しかしそれにもかかわらず民俗文化は存在しています。問題はその存在の仕方です。今、例にとった食文化との関連で言えば、そこでは連続性が土台であり、非連続性が副次的な位置を占めていましたが、民俗文化の他の分野では、むしろここで非連続性と呼んだ要素の方が主要な位置をしめることが多いように思われます。非連続性とは、別の言い方をすれば、異質性ということです。すなわち民俗文化は今日の生活文化の一般の位相とは異質な文化として存在したり、機能したりしていることが多いのです。先にそれを図Bで示したのですが、今度はそれを幾つかのモデル・ケースによって考えてみます。

[事例1] 民間療法

近代科学のなかで交通・通信や家電製品とならんで、もっとも身近になっているものに医療があります。伝統的な民俗の一分野であった民間療法は、近代医学によって大部分が駆逐されたといってもよい位です。昔は、天然痘（痘瘡）やコレラやペストや肺結核といった恐ろしい病気の前に人間は無力も同然でした。それゆえ多種多様な呪術がおこなわれてきました。天然痘の邪気に対抗するために衣類をはじめ紅い色のものを用意したことは多彩な民間療法となっていました。今日では有り難いことに天然痘は地球上から駆逐されてしまいました。しかしそれに代るかのように、恐ろしい病気が幾つも出現しています。癌疾もなお最終的な克服には至っていません、またエイズとかエボラ熱といったこれまでなかったような難病も発生しています。たしかに大局的には、現代の医学や衛生学のめざましい発展によって病

気の危険は低下し、それと共にその方面の心配は消え、民間療法は衰微しています。しかしそれにもかかわらず、僅かながらにせよ、近代医学と民俗は並列して進行することがあります。それが起きる典型的な事例は、現代の医学がその機能を放棄する場合です。そうしたときに、人はたいそう戸惑います。その反応は人によってさまざまでしょうが、そのなかの幾らかの人々は、その瞬間から宗教や迷信の分野に入ってゆきます。これまで余り縁がなかった仏教の寺院や道教の観やその他の宗教の施設に参詣したり、時には祈祷師や呪文との接触に向かったりします。本人だけでなく、周囲の人々のそういう行動をとることがあります。その時、人は最新の医学の限界線に立っていることを知らされるのです。

【事例2】ビジネスと風水信仰

次に、合理的な推論や理知的な判断力の限界線上で伝統的なものとの接触が起きるという点では、難病や死病の場合と似通っているものの、やや趣の異なった事例を挙げてみます。それは例えば、ビジネスを営む人が、店舗の立地や開店の時期や門構えや屋号などを選択する上で風水師の占いを尊ぶという行動です。しかもそれは田舎の小さな商店や老齢の経営者に限られるといったものではありません。大学で経営学を学んだり、現代的な経営戦略を率先して実行している実業家においても珍しくはないのです。ちなみに数年前に日本のテレビ放送で、北京において経済活動の活発化と共に風水が流行していることが特集番組になったことがありました。今日の中国では改革開放政策によって個人や団体のビジネスのチャンスが飛躍的に高まり、それが経済面での活況につながっています。それと平行して、現実的な利益を願って多種多様な福神への帰依が強まっているようです。財神としての関帝や、有名な道教の八仙人への信奉などです。さらにそこに風水も加わってきているようです。背景には、個人の裁量によって経済活動に参加するチャンスが増えてきたという趨勢が挙げられるでしょう。それはまた個人がリスクを負う度合いも高まったということで、それだけ多くの人にとって不可知の部分とのふれあいが切迫した様相になってきたということになります。そこに伝統的なものが浸透する契機があるわけです。

【事例3】ファッションと古い民家の組み合わせ

最後にもうひとつ別の事例を挙げておきます。それは写真広告やイベントや観光における民俗文化の活用です。たとえば伝統的な家屋を背景に女性のモデルがポーズをとっているといった写真は、観光や新商品の紹介から芸術写真にいたるまで、今日では珍しくありません。古い民家や家具や道具類などと新しいファッションの衣装との組み合わせが、斬新な映像世界を作りだすのです。これは、決してファッションや新製品の新しさを強調するために、敢えて古ぼけた品物を傍に置くといったものではありません。そんな単純な対比には、私たちは少しも魅力を感じないでしょう。むしろ民俗的文物が多少とも意表をつくような印象を

与えることができる要素になっていることが、そうした組み合わせの背景と考えるべきでしょう。要するに、それらは日常生活の延長ではない何物かなのです。それゆえ、当然のことながら、最新のファッションをつけた女性に取り合わせるのには、古い民家に限定されません。アラスカの氷山とか熱帯の竹林とかでも構わないのです。逆に言うと、今日、民俗的要素は、アラスカの風物や熱帯雨林とも代替可能な文物なのです。

(異質文化としての民俗文化)

以上は見本として数例を挙げたのですが、言うまでもなくこれらは珍しい現象ではありません。ありふれた出来事をモデル・ケースの形にしてみたまでです。すると、こうした変哲もない事象においても、民俗文化が現代社会において占めている位置があきらかになってきます。以上の3例から、3つのことがらを読み取ることができます。第一は、現代の私たちは、伝統的な文化とさまざまな仕方で関わっているということです。科学的な思考や科学技術が浸透したからと言って、伝統的な生活文化の様式は消えてしまうわけではありません。ただしこの場合に注意すべきは、古い民俗が昔ながらのまま延命していると理解するのは適切ではないでしょう。それらは古い民俗が本来占めていた意味や機能においてではなく、今日の状況に即した変質を遂げているのです。したがって、更に時間が経過すれば、いずれは消えて行くという性格のものではありません。現代の文化的状況の有機的な構成要素となっているのです。第二は、伝統的な文化との関係は私たちにとっては仕来たりや義務や社会的な約束といった拘束的な性格ではなく、私たちが自由に選択してそれと関わって行くということです。民俗、すなわち生活文化の伝統的な形態は、以前は社会的なルールでもありました。つまり、村の生活における仕来たりであり、ならわしであったのです。しかし今日それらは、ここで取り上げた3例の場合も、社会的な強制力によるものではなく、また誰かに強いられてなされるものではありません。これは古い民俗を今に伝えている場合の多くに見られることです。結婚式を昔ながらの過門戸帳尻から相看、放定と進んで当日の拝天地の手続きなどを踏んで行うか、それともそういったものを無視したり、流行の西洋風の形態で行うかといったことは、関係者の自由に委ねられています³⁾。従って、昔ながらの儀礼を守る場合も、それは選択した結果なのです。場合によって昔ながらの仕来たりを守るほかないような状況がないとは言えませんが、その度合いは非常に小さくなってきているというべきでしょう。少なくとも、それは社会規範としての拘束性をほとんどもたなくなっています。第三は、私たちが伝統的な文化の形態に接続するときには、多かれ少なかれそれが普段の生活のレベルとは違ったものと関わっているとの意識を伴いながら、それを行っていることです。伝統的な文化の形態、すなわち民俗文化は、普段の生活とは異質な要素をもっており、その効果を強く意識しながら、私たちはそれに関わるのです。

民俗文化が今日では通常の生活のレベルからは異質なものになっているという点をもう少

し踏み込んで考えてみます。先に挙げた3例は、種類の違うものですが、いずれも民俗文化が通常とは違った質を帯びているということを軸にして成り立っています。しかし異質な内容や異質な度合いには差違がみられます。

[事例1の評価]

一番切羽詰まっているのは第一の事例です。すわなち合理的な思考や判断の世界から非合理的な呪術の世界への転移であって、しかも別の世界観へのその飛び移りは全身全霊をもって行なわれるのです。必死の跳躍と言ってもよく、それゆえその当人は周りの人々からはまるで別人になってしまったように映ったとしても不思議ではありません。

[事例2の評価]

それにたいして第2の事例は、同じく古い宗教的な気圏への先祖返りと言っても、その度合いは軽微です。ビジネスの不可知な限界線上で風水や占いと接触するのですが、その中身は一樣ではなく、当人が真剣に信じている場合もあれば、宝籤でも買うような軽い気持ちで関わっていることもあります。極端な場合には、店構えの造作に風水の占いの結果を取り入れて、風水の教えるその縁起の良さを宣伝材料に活用するという計算づくのこともあり得るのです⁴⁾。民俗文化に手を伸ばすにしても余裕をもって行なうのであり、止めようと思えばいつでも放棄できるという自由意志が勝っているのがこの第二の事例です。

[事例3の評価]

第三の事例になると、その性格はさらに強まります。ここでは行動を支配しているのは、民俗文化をその効果を計算して活用しようとする意図であると言えます。しかしそれは別段悪い意味ではありません。それが私たちの生活を豊かにし、私たちの文化を幅のあるものにしていく面があります。ではなぜ民俗文化が活用されるかと言うと、それが私たちの日常を構成している通常の要素とは多少とも異なったところがあるからで、それゆえそれを導入することによって一種の異化作用を計算できるからです。異化作用とは、生活文化のなかに落差をつくり出すことです。レベルの違ったものを配置することによって、平面を起伏に変えるのです。すなわち、四合院建築を背景にした最新のファッションを身につけた女性モデルの映像は、異なった2つの文化の出会いあるいは衝突という効果を生み出すのです。

本日は、とりわけ民俗文化が現代の社会のなかで占めている位置について考えてみました。伝統文化と現代社会の関係は多面的でありますから、ここで取り上げたのは、一部分に過ぎません。またそうした問題を本格的にとりあつかうには、それに相応しい方法や、諸々の現象を整理するための概念や用語の検討も必要です。しかし概念や用語を整えるのと並んで重要なのは、あるいは用語の洗練度などよりもずっと重要なのは、やはり基本的なものの見方でしょう。民俗文化は、今日、さまざまな形で私たちの生活のなかに組みこまれています。その様態はまことに多彩であります。その多くは、昔ながらの文化が今なおしぶとく行き

つづけているといった観点からは理解できないものなのです。〈今なお〉という見方をした途端、事態の本質が見えなくなってしまうといった現象が沢山あって、またそこに現代社会の文化的な特色があるといってもよい位です。そういう視点から私たちが暮らしている状況を見直そうという気持ちで、拙い話をいたしました。有り難うございました。

注

- 1) ここでの定義は『民俗研究ハンドブック』上野和男・高桑守史・野村純一・福田アジオ・宮田登編、吉川弘文館 1978, p. 7/8の次の解説に沿っている。〈民俗学の対象とする民俗は、一般には民間伝承と呼ばれ、衣・食・住をはじめとして、人々が先祖より受け継いできた日常生活の上で繰り返し行なわれる行われる生活事実のすべてを意味する。いまして具体的にいうならば、私たちの身のまわりで、日常的に繰り返して行なわれている冠婚葬祭、隣人や親戚などとのつきあいや贈答、さらには祖先たちのころより生活の糧を得るために行なわれてきた生産活動や消費生活、およびそれに使用される用具類、衣食住など、人々が昔からしきたりごととして、いわば無意識のうちに、それゆえ類型的な様式をもって行なわれる行為や存在が広い意味での民俗あるいは民間伝承であるということができよう。〉

なお今日の日本民俗学界では従来の行き方を修正するさまざまな試みがあるが、特に果敢な批判としては次を参照、大月隆寛「民俗学という不幸」（青弓社 1992年）

- 2) ヘルマン・パウジンガーの著作には拙訳がある。参照、「科学技術世界のなかの民俗文化」（愛知大学国際コミュニケーション学会ディスカッション・ペーパー第2号、2001年3月）
- 3) 中国の婚姻儀礼に関わる用語是北京東郊について記録した次の文献による。直江広治「中国の民俗学」（岩崎美術社〈民俗・民芸双書13〉1967）197頁以下。
- 4) 風水の歴史を溯ると、そこには合理的な計算が働いていたことが分る。すわわち風水が盛んになったのは中国でも朝鮮半島でも12世紀頃からであるが、それは折から台頭した中世社会の担い手である開発領主たちが、古代的な権威である貴族や寺社の荘園や権益を犯して成長してゆくさいの対抗的権威の意味合いがあったのである。